

楽のせ



奥多摩

《第47号》

平成29年10月15日
(一社)奥多摩観光協会



絵「奥多摩駅」 藪野 健 (やぶの けん)

画家、早稲田大学教授、二紀会理事、日本芸術院会員、広島大学名誉博士、第62回日本芸術院賞受賞
この絵は2014年に描かれたもので、現在氷川小学校で展示されています。

奥多摩の安全について

青梅警察署山岳救助隊は、奥多摩地区の駐在所勤務員を中心とした隊員で構成されています。

奥多摩の駐在所勤務員は、受持区内の各家庭を訪問して防犯指導や意見・要望を聞く巡回連絡や悪質な交通違反者の指導取締り、窃盗や不法投棄などの様々な犯罪の抑止と検挙を目的としたパトロール、事件や事故などの110番通報への対応、その他地域行事への参加などが主たる業務です。

そうした中、登山者本人からの「山の中で、道に迷った。」「転倒又は滑落して怪我をしてしまった。」などの救助要請や、「家族が奥多摩の山へ行くと言って出掛けたまま帰ってこない。どうしたらよいか。」などの相談や連絡を受けた場合に、青梅警察署山岳救助隊を編成し、奥多摩消防署山岳救助隊と連携して救助活動に当たります。

平成28年の活動状況は、山岳遭難が58件発生し、延べ79日出動をしました。遭難の主な原因は、道迷いと滑(転)落です。

奥多摩の山々は、地元住民の皆様の大切な生活の場であり、小河内ダムの水源地としての役目を果たしているため、登山道以外の地図に載ってい

ない巡視路や作業道、その他野生動物のけもの道が数多くあり、道迷いの原因ともなっています。

また、鳩ノ巣溪谷などで知られるように溪谷の美しいところですが、その分、入山口から尾根に出るまでがとても急峻で、下山途中、疲労による不注意のため転倒又は滑落をして怪我をしたり、道に迷い急峻な崖から転落したりするのです。

しかし、安全に登山をするためにライトやレインウェアなどの必要な装備品を揃え、当日の行程を確認するなど事前の準備は勿論、登山計画書の提出、山中での現在位置の確認、体調管理などの基本を省略しなければ、決して危険なことはありません。

万が一の時は、ためらわず110番通報してください。青梅警察署は、奥多摩の治安維持と安全登山のため、各種事案への迅速かつ適正な対応に努めてまいります。今後とも、ご理解とご協力をお願いいたします。

警視庁青梅警察署奥多摩交番 大重 雅弘

～とおきの山歩き:三ノ木戸山～

三ノ木戸山(さぬきどやま)は奥多摩町のほぼ中央に位置し、石尾根の東端にあります。

この珍しい名前は平将門が三ノ木戸(城柵)を設置していたと伝わるのが由来で、周辺には将門伝説に関わる地名が多く残ります。

また、奥多摩は現在のような川沿いの道路が作られる前は、山々の尾根を道として交易が行われていました。この三ノ木戸山周辺の林道や集落跡には江戸時代の石碑なども残り、歴史の息吹が感じられます。

三ノ木戸山の標高は1174m、奥多摩の山岳の中では比較的低い山です。しかし奥多摩駅からのコースタイムは2時間50分と、周辺の山岳と遜色のない時間がかかります。

奥多摩駅を出発すると奥氷川神社を横目に見ながら、氷川大橋を渡ります。その橋の先は「南氷川」の集落となり、かつては日原や小河内からの物産の集積地として栄えました。

南氷川にある保育園の向かいには「奥多摩むかし道」の看板が見え、右に曲がります。そこからすぐ奥多摩むかし道の難所と言われる羽黒坂になります。その途中には羽黒三田神社の参道があり、三ノ木戸山へはその参道を上ります。手ごたえのある急な参道の階段を上りきり、陸橋を渡ります。そこから先は足場の悪い参道となり、上った先には羽黒三田神社があります。羽黒三田神社は861年に穴沢天神として始まり、奥多摩の中でも古い歴史を持つ神社です。

神社の裏へ回り、登山道を上ると農指(ノーサス・ノーザス)の集落、東方への視界が開ける明るい集落です。今でこそ「こんな標高の高い場所に住んで不便では？」と思われるかもしれませんが、尾根沿いの標高の高い場所は日当たりが良く、日照時間の短い谷間よりも暖かく住み心地が良かったといわれます。

農指の集落を過ぎると斜面をトラバースする形でなだらかな一間道が始まります。その一間道が終わるとそこは城(ジョウ)の集落。

ここは将門が城を築いた場所と云われ、うぶすな様として将門神社が祀られていました。

城の集落から三ノ木戸山へは林道経由と登山道経由の道が分岐しますが、ここでは登山道経由の道を進みます。

スギやヒノキの植林されたゆるやかな登山道を上ると絹笠(キヌガサ・キノカサ)の集落の裏手を通り過ぎます。絹笠は将門が金の笠を置いた場所と伝わり、その「きんかさ」が訛り、現在の「絹笠」の地名になったと云われます。その絹笠には昭和の中期までは住人がいましたが、現在は無住地となっています。

登山道を進むと、峰畑峠と呼ばれるなだらかな場所があり、小さな祠があります。かつては峰畑集落につながる道があったそうですが、現在道は判然としません。現在は無住地となってしまった峰畑集落にも将門神社が祀られていました。

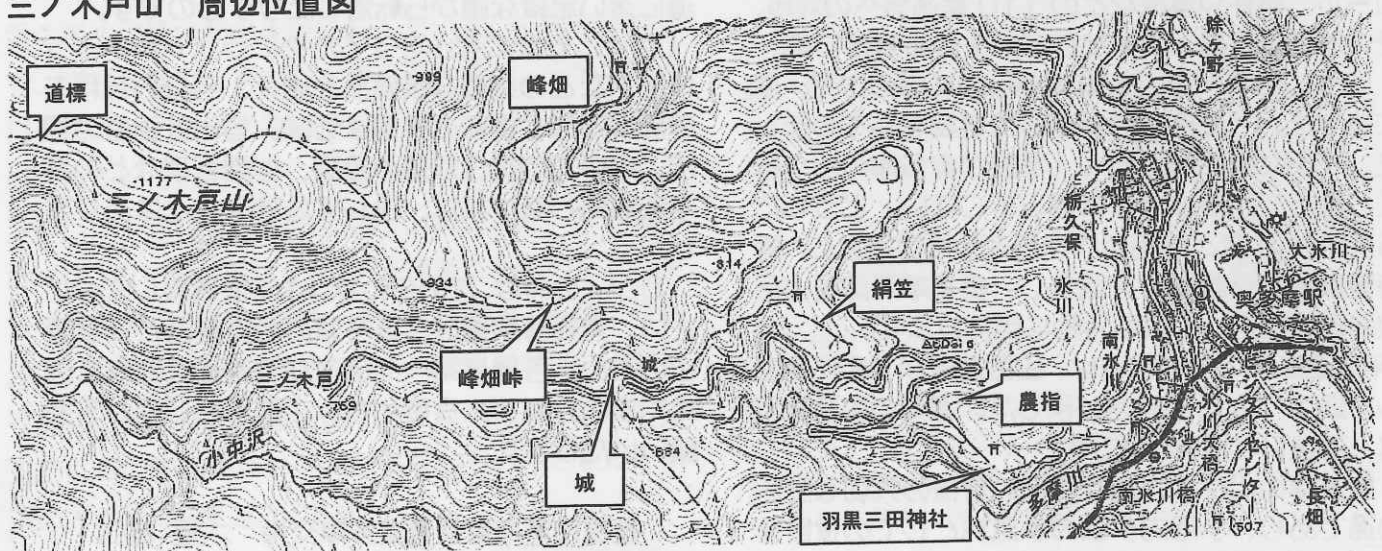
現在は麓の根元神社に移されましたが、奥多摩周辺の将門伝説の根強さが感じられます。

峰畑峠から三ノ木戸山までは一登り。広葉樹・人工林、様々な顔を見せる奥多摩らしい登山道を歩きます。その途中、右手には東京農大演習林が広がっています。

三ノ木戸山の山頂をトラバースするやや狭い登山道を過ぎ尾根に乗ると、東京都が設置した道標があります。その標識に「三ノ木戸山」とは記載されていませんが、そこが三ノ木戸山へ向かう登山道の分岐です。三ノ木戸山の山頂はとても広くなだらかです。落葉している時期には真正面にどっしりとした雄大な御前山を望めます。

歴史と豊かな自然に包まれた三ノ木戸山、ぜひ一度はお越し下さい。(矢作 佑允)

三ノ木戸山 周辺位置図



この地図は、国土地理院発行の二万五千分1地形図(奥多摩湖)を使用したものである。

～行って来たあよ 棒ノ折山～

7月11日(火)晴「棒ノ折山～初夏の山歩き」
 に行って来ました。奥多摩友の会イベントとして
 は、初めてのコースです。

8時30分軍畑駅集合。お客様29名とガイド
 10名、総勢39名が車3台に分乗して、一路埼
 玉県飯能市「さわらびの湯駐車場」へ向かいまし
 ました。駐車場で、挨拶・体操・班割をし、諸注意と
 して、熱中症予防の水分補給とイラクサへの注意
 を促しました。イラクサは触れただけでトゲが刺
 さりイライラと痛むのです。

名栗湖畔の登山口へ移動し、9時30分に班毎
 に棒ノ折山を目指して登山を開始。関東ふれあいの
 道の一部である、白谷沢沿いの緩やかな山道を
 歩いて行くと、やがて岩場の道に出ました。心地
 よい涼しさ！足元に注意しながら、沢を渡り、登
 って行くと白孔雀の落差10mの見事な滝が…。

その後、森をぬけて階段を登ると11時10分
 林道との出会いに出て大休止となり、水分補給と
 行動食をとりました。

11時30分登山再開。急登を進むと大きな岩
 が出現、岩茸石です。ここは分岐で左は河又、右
 は棒ノ折山。右折し歩いていくと階段が続いてい
 ました。息を切らせて登って行くと、やっと尾根
 の権次入峠(893m)に出ました。棒ノ折山まで20
 分、休まず山頂を目指しました。

棒ノ折山(969m)到着12時。頑張っ登って
 来たので、達成感いっぱいでした。山頂は大勢の
 登山客で賑わっていました。埼玉県と東京都の県
 境です。直下には名栗湖、遠くは武甲山等の山々
 が眺望できます。右手に飯能市方面の街並みが見
 えました。

12時40分下山開始。山頂から奥茶屋まで約
 1.8kmの下り坂。下山開始から30分後、小さな
 祠がありました。東京都側の「棒ノ折山」地名由
 来の祠です。御神体は、灰白色の凝灰岩で直径約
 17cm、長さ約25cm程の棒。鎌倉時代に、畠山
 重忠が石の杖をついて登って来たなら折れてしま
 ったので、この山を棒ノ折山と呼び、折れた棒は御
 神体として祀ったそうです。この辺りは、秩父か
 ら鎌倉へと続く鎌倉道が通り、畠山重忠の伝説が
 残されています。

もう一説 埼玉県側名栗川の谷では棒ノ折山の
 ことを「坊の尾根」と呼んでいました。山頂の地
 形がお坊さんの頭のような丸い形から名付けられた
 ようです。

権次沢沿いに更に下っていくと、清流の中に奥
 多摩名産のワサビ田が作られていました。そして
 最後の橋を渡り14時10分に百軒茶屋に到着し
 ました。

予定にはありませんでしたが、バスの予定時刻
 に余裕があるというので、橋の下で休憩となりま
 した。川原において、顔の汗を流す人は「気持ち
 いい～」と叫んでいました。流れに手をつけると
 冷たい。見上げると、下山してきた道とワサビ田
 が見えました。ここで地元ガイドが、ワサビの話
 をしました。ワサビを育てる水温から食べ方まで。
 ご飯にワサビをすりおろし、鯉節をのせて、醤油
 をかけるだけでおいしい。莖は湯通しして醤油漬
 けがおススメと。

最後は10分程歩いて清東橋バス停に到着。整
 理体操と反省会。前半は沢沿いの涼しい岩場の道、
 山頂では埼玉県側の景色を楽しみ、後半は人工林
 と天然林の中を下り、ワサビ田の脇を通り、川原
 で清流に癒され、ワサビの話に大満足でした。

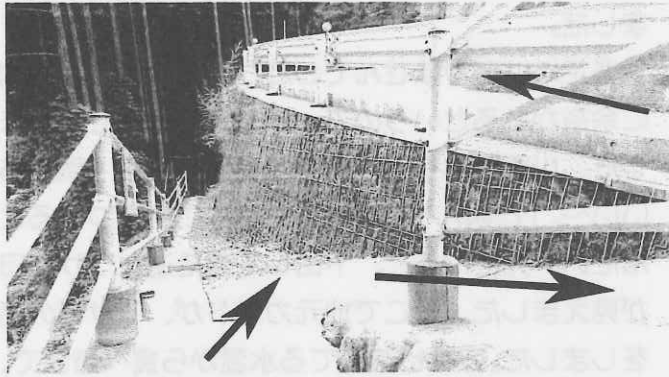


名栗湖→白谷沢→岩茸石→権次入峠→棒ノ折山

全員が無事下山できたことは何よりで、笑顔が
 印象的でした。バス15時37分発に乗りし川井
 駅へ。初夏の山歩きを満喫しました。(武田 和代)

第1事例

5月〇日午前9時過ぎ、50代の女性は息子と二人、鳩ノ巣駅から御岳山を目指し雲仙橋を渡っていた。今日はここから越沢西コースを大楯峠、御岳山へのコースだ。松の木尾根から鳩ノ巣の展望を見た後、林道のすぐ下にある道を沿うようにして進んでいった。林道工事は以前の登山道を切り裂くように造られていた。



ここで右に曲がって林道に出ればよかったのですが？
まっすぐキャンプ場の方向に進んでしまった。



ガーデンキャンプ場に入らないように「登山道アドレス」の方向指示に従い進んでいくと、沢に出た。この辺りはガーデンキャンプ場が営業をし

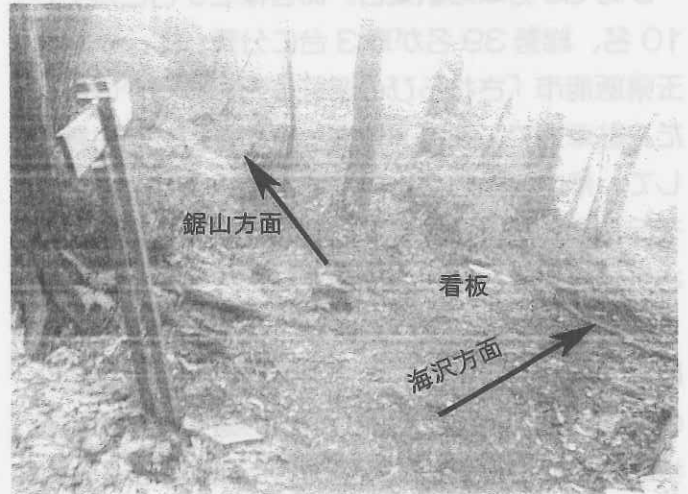


ていたころは、お客が大勢来ていて、苔むす沢で遊んだと思われる。沢には所々に橋が架かっていて、整備されないまま放置してあった。

50代女性がその橋を渡ろうとしてバランスを崩し、約3m下に転落、顔面を打ち、左手首を損傷した。10時6分、息子が救助を要請した。歩き出してまだ、約1時間しかたっていない。沢に出たときに「変だな」と思わなかったのか？

第2事例

5月下旬、御岳駅から御岳山を経て大岳山に着いたのが10時20分。40代の男性は一人で大岳山から海沢コースを経て奥多摩駅を目指した。



大岳山から鋸尾根方面に少し歩くと、分かれ道がある。右に曲がり海沢に行く道には木が「通せんぼ」するように置いてあった。また「海沢方面」と矢印の書いてある看板は脇に捨てられていた。そこから約1時間、急な悪路を下り沢に出た。広く開墾されたワサビ田を過ぎ、沢を渡りしばらく下っていくと、沢の方に戻るような道と、下って行く道との分かれ道があった。たぶんこの道を沢の方に行き、大滝の上に出ようとしたのではないのか？ すずむに従い、道はなくなり滑り落ちるようになった。そして崖のところで行くことも戻ることもできなくなった。

午後1時14分携帯電話から救助要請をした。救助隊が到着し登山道から呼びと返事があり、場所は確定した。そこからロープを使い救助した。大滝の音が聞こえていた。

今回の事例はいずれも「道迷い」が原因での事故です。最初の事例は、展望台から少し登り、あとはどんどん下って行った。そして沢に出た。この時点で「おかしい、道が違うかも」と思ったはずですが、2番目の事例では、身動きできなくなるまでには「おかしい」と思ったはずですが、「たぶん大丈夫だろう」「もう少し行ってみよう」「今までも何とかなっていたから」と考え、泥沼に入ってしまった。山を歩いているとき、少しでも「おかしい、迷ったかな」と思ったら、まずその時点で行動をストップします。そして休憩を取り、携帯食、水分を取り落ち着くことです。そして億劫でも来た道に戻るか、尾根に登り返しましょう。つらくてもその事があなたを守ります。

(小峰一郎)

ドングリ談義

森の林床に“坐る(土の上に人)”の字に合わせてじかに腰をおろすと、ひとこらにくらべ、漂う空気感触や色あいが変わってきているのを感じます。小鳥のさえずりにまじって、時折何か堅いものがかすかな音を立てて落ちるのが聞こえます。音の主はドングリです。

ドングリはブナ科のナラ、カシ、シイ類の果実の愛称で、堅い皮をもつ太っちょなからだに殻斗カクドいうはかまをつけています。堅い皮はリスやネズミに簡単に食い破られませんが、栄養たっぷりの種子を包んで、からだは丸みをもっています。コナラやミズナラは落ちるとすぐに根を出し、転がって“お池にはまって、さあ大変”とならないよう、からだを固定します。根が落葉の層をつきぬけて下の土に到達するまで生きついでいくだけの十分な栄養を貯えているので、からだは丸々と太っています。

種子はタンニンやサポニンを含み渋みがありますが、マテバシイ・スダジイなどシイ類は渋みが無くおいしいです。ナラやカシのドングリを運ぶカケス(数キロ)、リス(数百メートル)、ネズミ(10メートルくらい)などは、食べて渋くないのですかね。私が指導を受けた森林生態学のN先生は、森の中にネズミがため込んで冬を越したドングリは、かじってみたら渋くなかったよと言っておられました。私はまだためたことはありません。

ドングリが成熟するのは、コナラ、ミズナラ、アラカシ、シラカシ、カシワでは受精したその年の秋、クヌギ、ウラジロガシ、アカガシ、ツクバネガシ、マテバシイ、スダジイ、アベマキでは翌年の秋と成熟の早さが違います。(カシ類はガシと濁るものは翌年と覚えています)。

さて、英語のOak(オーク)はカシ、と訳されていますが、イギリスをはじめ北方のオークは落葉するので、(カシ類は常緑)、「ナラ」と訳しておけば、ウイスキー樽に使うオーク材はミズナラであるということと、それこそ“うまく”合いますね。

(橋上 一彦)



人間の生活圏に進出した野鳥

今回は身近な野鳥「ヒヨドリ」をとりあげました。(ヒヨドリ: スズメ目ヒヨドリ科・全長28cm)

平地の都市部から、川地の森林まで身近で見られる野鳥です。ピーヨと中高い声で鳴き、野鳥ファンでなくても多くの方がよく知っている野鳥です。しかし、私たちが、ヒヨドリを身近に見られるようになったのは、1970年頃からで、それまでは山地へ行かなければ見る事の出来ない鳥でした。

おそらく、その頃に人間の生活圏内に進出して来たようです。

中世以前では、身近な鳥ではなく故事、ことわざなどにも取り上げられた様子はなく、本当に遠い存在だったようです。

ヒヨドリは通常、留鳥として季節に関係なく私たちの近くで見られますが、一部、生活圏を移動して夏には北海道へ、冬には、暖地へ、移動するようです。その時は、当然、海峡をわたりますが海面すれすれを集団で移動します。出来るだけ天敵であるタカ等から身を守るためです。風の抵抗を少なくするためでもあるようです。

ところで、ヒヨドリは、実は非常に日本らしい鳥で日本を訪れるバードウォッチャーにとっては大変めずらしい鳥で、日本に来た実感がもてる鳥のようです。

ヒヨドリは、欧米には分布していません。日本以外では一部朝鮮半島などきわめて限られた地域にしか生息していないようです。

日本の準固有種といえる存在です。ピーヨ、ピーヨとうるさい存在ですが、この機会にぜひ、好きになってほしい野鳥です。



画 大澤新次

(畑 幸夫)

秋から冬 奥多摩山歩き

～イベント案内 11月から1月～

- No.23 11月 9日(木) 青梅・長淵丘陵
No.24 11月 13日(月) 倉戸山 ～紅葉を楽しむ～
No.25 11月 22日(水) 紅葉真っ盛りの奥多摩むかし道
No.26 11月 27日(月) 六つ石山～晩秋の石尾根
No.27 12月 6日(水) 花折戸尾根から本仁田山へ
No.28 12月 12日(火) 「山ふる」で落ち葉ふみとそば打ち体験
No.29 1月 19日(金) 野鳥観察と冬芽の観察
No.30 1月 30日(火) 冬模様の御岳山

小河内ダム(奥多摩湖)完成から60年 その2

昭和7年10月、調査測量は終了した。東京市の説明では「1年後には、必ず移転料、買収費等一切を渡すから、そのつもりで山の手入れも、畑作りも、家の修繕も、賃貸関係、道路、学校の関係等すべて、今後1ヶ年とみて、考慮してよろしかろう」この市当局の言葉を信じ、村民は移転地を物色、手付金を払い、宅地の売買契約をした。然るにその期間は経ったが、市当局の言明は実行されない。手付金は流れた。移転準備は空しいものになった。

なぜ工事が始まらなかったのか？それは多摩川下流域の神奈川県、稲毛・川崎二カ嶺用水組合が反対したためである。二カ嶺用水は徳川家康公時代、この地域は水がないため、田んぼが出来ず、米を作ることが出来ない。麦、稗、粟、大豆などを作っていた。「この用水が出来れば」との思いから、百姓たち長い間の苦勞の末に完成したのである。

二カ嶺用水は慶長2年(1597)、玉川上水は承応元年(1652)の起工であり、比べると55年も前であった。当然水利の優先権を有していて、しかも用水欠乏のために絶えず水不足に悩んでいた。にもかかわらず、東京水道局は羽村取水口の取水量を、十分に目的の下に、古来多摩川を横断し「じゃこ工法」で造られていた羽村堰を、明治38年ごろから無断でコンクリート堰に改造した。また、創設当時、給水量毎秒100立方尺(約2.7m³)を標準としていたが、下流の利害関係者に無断で、その給水量を2倍の毎秒200立方尺とした。東京市は下流の迷惑も顧みず横暴である。二カ嶺用水組合側が東京市水道局の従来のやり方について、長年の不満が累積していたことが、解決の大きな障害になっていた。

「湖底の村の記録」奥多摩湖愛護会

奥多摩地域情報局

- 10月15日 山のふるさと村音楽祭(音楽の都ウイーンで活躍するウイーンフィルメンバーによる演奏会)
10月21日、11月18日 白箸づくり 日原森林館
10月28、29日 奥多摩ふれあい祭り登計原運動場
11月11、12日 山のふるさと村秋祭り
11月26日 小河内ダム60周年記念イベント
湖底の村で生活していた住民の方に、当時の生活や、ダム建設中の話をシンポジウム形式でお話していただきます。
水と緑のふれあい館 0428(86)2731

ハチ情報

今年は8月に雨の日が多く、それほどハチは多く飛んでいませんでした。しかし、まだまだこれから活発に行動します。

先日アシナガバチに左手の甲を刺されました。とっさに歯で噛みながら毒を吸い出し持っていたポイズンリムーバーでさらに毒を吸い出したおかげで当初は5cmぐらいの範囲で腫れましたが、翌日にはすっかり治っていました。

ハチに刺された時の応急処置

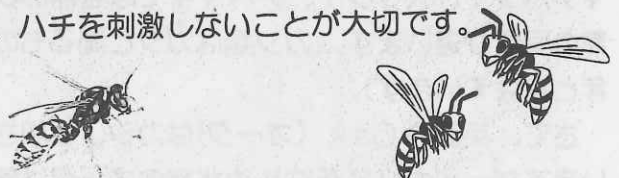
- 1.ハチの針が残っている場合はさらに毒が入らないように注意して抜く。
- 2.刺された場所から離れる。この時、大声を出したり振り払ってはいけません。
- 3.刺された傷口を水で良く洗い流して冷やす。ポイズンリムーバーで毒を吸い出す。口で毒を吸い出してはいけません。虫歯や歯茎などから毒が入る。安静にして20～30分ほど様子を見て異常がないようなら、まずは一安心、途中で様子が少しでもおかしいと思ったら、病院に行きましょう。

ハチに刺されないために

濃い色の服装(黒、赤、青)を避ける。

臭いのあるもの(ヘアースプレー、香水)はつけない。

以上、ハチを刺激しないことが大切です。



次号発行予定：平成30年1月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会
住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210
電話 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集 名人・達人観光ガイドの会